

かもめ・フーニア伯父さん  
三人姉妹・桜の園

チエーホフ

世界

# 世界の文学

27

チェーホフ

かもめ

神西 清訳

ブーニャ伯父さん

三人姉妹

桜の園

短・中篇小説14篇 神西 清 池田健太郎 原 卓也訳

中央公論社

チェーホフ

訳者 神西 清  
池田健太郎  
原 卓也

昭和39年6月1日初版印刷

昭和39年6月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

モスクワ芸術座による  
チエーホフの戯曲舞台写真



かもめ

上 第二幕・1898年

下 第三幕・1898年



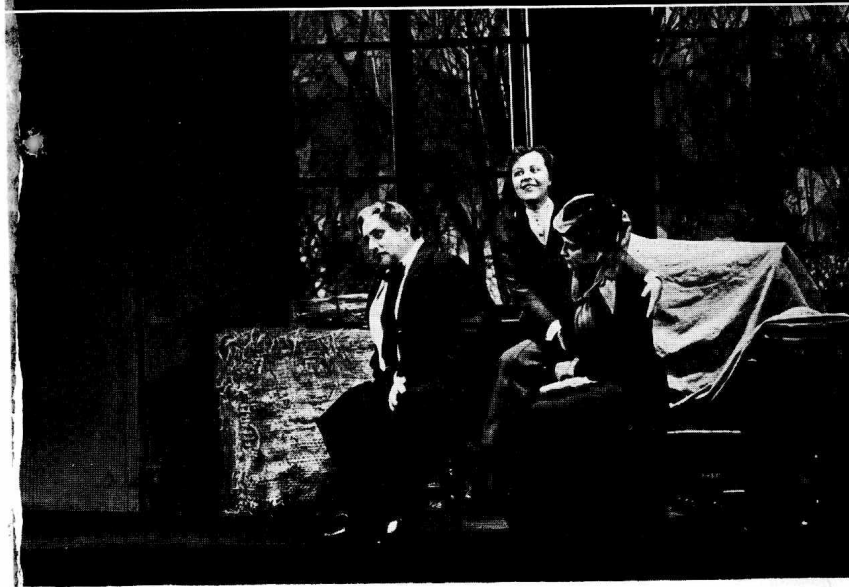


ブーニャ伯父さん

上 第二幕・1942年、下 第三幕・1960年



三人姉妹  
上第一幕・一九五八年、下第四幕・一九五八—一九五九年 日本公演



桜の園

上 第一幕、下 第四幕 1958—9年・日本公演

目次

戯曲

かもめ

9

ブーニャ伯父さん

67

三人姉妹

123

桜の園

195

小説

小役人の死

255

嫁入り支度

259

アニュータ

265

物騒な客

ワーニカ

接吻

ねむい

ともしび

六号室

中二階のある家

箱にはいった男

可愛い女

犬を連れた奥さん

いいなずけ

解説

年譜

518 504 481 461 445 430 409 353 312 305 284 279 271

戲

曲

かもめ

ブーニャ伯父さん

三人姉妹

桜の園

神西 清訳

神西 清訳

神西 清訳

神西 清訳

か  
も  
め

— 喜劇 —  
四幕

## 人物

アルカーデナ（イリーナ・ニコラーエヴナ）とつぎ先の姓はトレイブレヴァ、女優

トレイブレフ（コンスタンチン・ガヴリーロヴィチ）（その息子） 青年、15

ソーリン（ビョートル・ニコラーエヴィチ）アルカーデナの兄、6

ニーナ（ミハイロヴナ・ザレーチナヤ）若い処女、裕福な地主の娘

シャムラーエフ（イリヤ・アフアナシーエヴィチ）退職中尉、ソーリン家の支配人

ボリーナ（アンドレーエヴナ）その妻

「マリーシャ」その娘

トリゴーリン（ボリース・アレクセーエヴィチ）文士

ドールン（エヴゲーニイ・セルゲーエヴィチ）医師

メドヴェーヂェンコ（セミョーン・セミョーノヴィチ）教員

ヤークフ 下男

料理人

小間使い

ソーリン家の田舎屋敷のこと。——三幕と四幕のあいだに二年間が経過

## 第一幕

ソーリン家の領地内の庭園の一部。広い並木道が、観客席から庭の奥の方へ走って、湖に通じているのだが、家庭劇のため急設された仮舞台にふさがれて、湖はまったく見えない。仮舞台の左右に灌木の茂み。椅子が数脚、小テーブルが一つ。

日がいま沈んだばかり。幕のおりている仮舞台の上には、ヤコフはか下男たちがいて、咳ばらいや槌音がきこえる。散歩がえりのマーシャとメドヴェーチェンコ、左手から登場。

メドヴェーチェンコ あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どういうわけです？

マーシャ わが人生の喪服なの。あたし、不仕合わせな女ですもの。

メドヴェーチェンコ なぜです？（考えこんで）わからん

ですなあ。……あなたは健康だし、お父さんにしたって、金持じゃないまでも、暮らしに不自由はないし。僕なんか、あなたに比べたら、ずっと生活は辛いですよ。月に二十三ルーブリしか貰ってないのに、そのなかから、退職積立金を天引きされるんですからね。それだって僕は、喪服なんか着ませんぜ。（ふたり腰をおろす）

マーシャ お金のことじゃないの。貧乏人だって、仕合わせにはなれるわ。

メドヴェーチェンコ そりゃ、理論ではね。だが実際となると、そうは行かない。僕に、おふくろ、妹がふたり、それに小さい弟——それで月給が只の二十三ルーブリ。まさか食わず飲まずでもいられない。お茶も砂糖もいりますね。タバコもいる。そこでキリキリ舞いになる。

マーシャ（仮舞台の方を振り向いて）もうじき幕があくのね。

メドヴェーチェンコ そう。出演はニーナ嬢で、脚本はトレープレフ君の書きおろし。ふたりは恋仲なんだから、今日はふたりの魂が融合して、同じ一つの芸術的イメーヂを、ひたすら表現しようという寸法でさ。ところが僕とあなたの魂には、共通の接点がない。僕はあなたを想っています。恋しさに家にじっとしていられず、毎日一里半の道を、てくてくやって来ては、また一里半帰っていく。その反対給付といえ、あなたの素気ない顔つき

だけです。それも無理はない。僕には財産もなし、家族は大きいと来てますからね。食うや食わずの男と、誰が好きこのんで結婚なんかするものか？

マーシャ つまらないことを。(嘆きタバコをかぐ) お気持は有難いと思うけれど、それにお応えできないの。それだけのことよ。(タバコ入れを差し出して) いかが？

メドヴェーヂェンコ 欲しくありません。(間)

マーシャ 蒸し蒸しすること。晩ばんくなって、ごろごろザーッと来そうね。あなたはしょっちゅう、理窟をこねるか、お金の話か、そのどっちかなのね。あなたに言わせると、貧乏ほど不仕合わせなものはないみたいだけれど、あたしなんか、ボロを着て乞食ぐらしをした方が、どんなに気楽だか知れやしないわ。……あなたには、わかってもらえそうもないけど……

右手から、ソーリンとトレープレフ登場。

ソーリン (ステッキにもたれながら) わたしはどうも、田舎が苦手でな、この分じやてつきり、一生この土地には馴染めまいよ。ゆうべは十時に床へはいって、けさ九時に目がさめたが、あんまり寝すぎたもんで、脳味噌が頭蓋骨に、べったり喰ったような気がした——とまあいった次第でな(笑う)。ところが昼めしのあとで、ついまた寝込んでしまって、今じゃ全身へとへと、夢にうなさ

れてるみたいな気持ちさ、早い話がね……

トレープレフ そりや勿論、伯父さんは都会に住む人ですよ。(マーシャとメドヴェーヂェンコを見て) 皆さん、始まる時には呼びますよ。今ここにいられちゃ困るな。暫時ご退場を願います。

ソーリン (マーシャに) ちよいとマーシャさん、あの犬の鎖を解いてやるように、ひとつパパにお願いしてみては下さらんか。やけに吠えるでなあ。おかげで妹は、夜つびてまた寝られなかった。

マーシャ 御自分で父に仰しやって下さいまし、あたしは御免こうむります。あしからず。(メドヴェーヂェンコに) さ、行きましょう！

メドヴェーヂェンコ (トレープレフに) じゃ、始まる前に、知らせによこして下さい。

ふたり退場。

ソーリン すると、夜どおしまた、吠えられるのか。さあ、事だぞ。わたしは田舎へ来て、思う通りの暮らしのできた例たとえがない。前にやよく、二十八日の休暇を取っちゃ、ここへやって来たもんだ。骨休めや何やら——とまあいった次第でな。ところが、くだらんことに責め立てられて、着いたその日から、逃げ出したくなったよ(笑う)。引揚げる時にゃ、やれやれと思っただもんだ。……だ

が今じゃ、役を退いてしまつて、ほかに居場所がない——早い話がね。いやでも、ここに釘づけだ……

ヤーコフ（トレーブレフに）若旦那、「わつしら」ちょいと一浴びして来ます。

トレーブレフ いいとも。だが十分したら、みんな持ち場にいてくれよ。（時計を見て）もうじき始まりだからな。

ヤーコフ 承知しやした。（退場）

トレーブレフ（仮舞台を見やりながら）さあ、これが僕の劇場だ。カーテン、袖が一つ、袖がもう一つ——その先は、がらんどうだ。書割りなんか、一つもない。いきなりパツと、潮と地平線の眺めが開けるんだ。幕あきは、きつかり八時半。ちやうど月の出を目がけてやる。

ソーリン 結構だな。

トレーブレフ 万一ニーナさんが遅刻しようもんなら、舞台効果は吹っ飛んじまう。もう来る時分だがなあ。あのひとは、お父さんやまま母の見張りがきびしいもんで、家を抜け出すのは、牢破りも同様、むずかしいんですよ。（伯父のネクタイを直してやる）伯父さんは、頭も髯（ひげ）ももじやもじやだなあ。ひとつ、刈らせるんですね。……

ソーリン（髯をしごきながら）これで一生、たたられたよ。わたしは若い時分から、飲んだくれそっくりの風采（ふうさい）——とまあいった次第でな。ついぞ女にもてた例しがない。（腰かけながら）妹のやつ、なぜああ、お冠りなんだろ

う？

トレーブレフ なぜかつて？ 淋（さび）しいんですよ。（ならんで腰をおろしながら）妬（や）けるんですき。おつ母さんはてんからもう、この僕にも、今日の芝居にも、僕の脚本にも、反感を持つてるんだ。というのも、演（や）めるのが自分じゃなくて、あのニーナさんだからなんです。僕の脚本も見ない先から、眼の敵（かたき）にしてるんだ。

ソーリン（笑う）まさか、そう気を廻さんでも……

トレーブレフ おつ母さんはね、この小つぽけな舞台で喝采（かつさい）を浴びるのが、あのニーナさんで、自分じゃないのが、癪（しゃく）のたねなんですよ。（時計を見て）ちょいと心理的な変わり種でね——おつ母さんは。そりや才能もある、頭もいい、小説本を読みながら、めそめそ泣くのも得意だし、ネクラースフの詩だつて、即座に残らず暗誦（あんしゅう）できるし、病人の世話をさせたら——エンジェルもはだしです。ところが、例しにあの人の前で、エレオノラ・ドゥーゼでも褒（ほ）めて御覧なさい。事ですぜ！ 褒めるならあの人のことだけでなくてはならん。劇評も、あの人のことだけ書けばいい。『椿姫』だの『人生の毒気』（ロシアの傾向的作家マルクティッチの戯曲）だのをやる時のあの人の名演技を、わいわい騒ぎ立てたり、感激したりしなくてはならん。ところが、この田舎にや、そういう麻醉剤がない。そこで、淋しいもんだから苛々（いらち）する。われわれがみんな悪者で、

親のカタキだということになる。おまけに、あの人は御

幣（おごかし）かつぎで、三本蠟燭（さんぽんろうしやく）（死人（しにん）のほとり）をこわがる、十三日

と聞くと顔いろを変える。しかも、けちんぼと来ている。

オデッサの銀行に、七万も預けてあることは——僕ちや

んと知ってるんだ。だのに、ちよいと貸してとでも言お

うもんなら、めそめそ泣き出す始末だ。

ソーリン お前さんは、自分の脚本がおつ母さんの氣に

入らんものと、頭から決めこんで、しきりにむしやくし

や——とまあいった次第だがな。案じることはないさ

——おつ母さんは、君を崇拜しているよ。

トレープレフ（小さな花の弁をむしりながら）好き——嫌い、

好き——嫌い、好き——嫌い。（笑う）そうらね、おつ母

さんは僕が嫌いだ。あたり前さ！ あの人は生きたい、

恋がしたい、派手な着物が着たい。ところがこの僕が、

もう二十五にもなるもんだから、おつ母さんは厭（いと）でも、

自分の年を思い出さざるを得ない。僕がいなけりゃ、あ

の人は三十二でいられるが、僕がいると、とたんに四十

三になっちゃう。だから僕が苦手なんです。それにあ

の人は、僕が劇場否定論者だということも知っている。

あの人は劇場が大好きで、あつばれ自分が、人類（じんるい）だの神

聖な芸術だのに、奉仕しているつもりなんだ。ところが

僕に言わせると、当世の劇場というやつは、型にはまっ

た因襲（いんしゆ）にすぎない。こう幕があがると、晩がたの照明に

照らされた三方壁の部屋のなかで、神聖な芸術の申し子

みたいな名優たちが、人間の食ったり飲んだり、惚（ほ）れた

り歩いたり、背広を着たりする有様を、演じて見せる。

ところで見物は、そんな俗悪な場面やセリフから、なん

とかしてモラルをつかみ出そうと血まなこだ。モラルと

言っても、ちっぽけな、手とり早い、御家庭にあつて

調法——といった代物ばかりさ。そいつが手を変え品を

変えて、百べん千べん、いつ見ても種は一つことの繰り

返しだ。そいつを見ると僕は、モーパッサンみたいに、

ワツと逃げ出んです。エッフェル塔の俗悪さがやり

切れなくなつて、命からがら逃げ出したモーパッサン

（その小説『さすらい』参照）みたいなね。

ソーリン 劇場がないじゃ、話になるまい。

トレープレフ だから、新しい形式が必要なんです。

新形式がいるんで、もしそれがないんなら、いっそ何に

もない方がいい。（時計を見る）僕は、おつ母さんが好き

です、とても好きです。だが、あの人の生活は、なんぼ

なんでも酷（ひど）すぎる。しょっちゅう、あの小説家のやつと

べたべたしちや、のべつ新聞に浮名をながしている。こ

れにやまつたく閉口です。時によると、人間の悲しさ

で、僕だって人なみのエゴイズムが、むらむらと起き

ることもある。つまり、うちのおつ母さんが有名な女優

なのが、くやしくなるんです。もし普通の女でいてくれ